

アジアにおける想像

井坂, 義雄

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

233

(終了ページ / End Page)

251

(発行年 / Year)

2001-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002827>

アジアにおける想像

The Imaginative in Asia

井坂 義雄

習 慣

階段を下りて庭に出たら、右手にある同じ構造でできている階段の出口に自動車が止まっていた。深夜に自動車の車輪が一つ外されて盗まれたあたりだ。

「先生、見たでしょう。葬式があるんです」と、ジャハンギールが教えてくれた。老人が亡くなったのだという。そのときは外出の用があったために、この老人の死については私は忘れてしまった。ジャハンの家、つまりオリポフ家のある四階建ての共同住宅には、36世帯が住んでいる。いつも会うと挨拶をする人もいれば、まったく知らないふりをして通り過ぎてしまう人もいる。これは私の場合ではなくて、住んでいる住民同士がそうなのだ。

ジャハンギールと散歩して帰ってきた夕方の庭先で、見慣れない若者が、バハディルとオジュクバンと一緒にあって親しそうに話していて、互いに懐しがっている様子。これにジャハンギールも合流した。私はいつものように、そばに立って聞いていた。ロシア語だ。「ジャガイモ」という語が多く出てくる。みんなはときどき、どっと笑い転げている。バハディルが途中で私に教えてくれた。畑でジャガイモを栽培して85袋生産したという。なぜ笑ったのかと聞いたら、たぶん、その話は嘘だから、とバハディルは説明してくれた。若者は物事を大げさに言う癖があるらしい。部屋に帰っていく若者の後ろ姿を見て、ジャハンとバハディルが「あいつ、一人で喋っていた」と言って笑っていた。みな近くの学校で学んだ仲間だ。バハディルが、この若者の経歴を私に話してくれた。この同級生は今、ロシアから一時的に帰ってきたところだ。祖母はドイツ人。母は離婚後に別の男性と結婚して一児をもうけている。若者とは瓜二つだという。父母はモスクワに住み、若者は父母のところに行ったり、ここタシケントに住んでいた祖母のところに来たりして育った。やがて祖母はドイツ

に行き、現在はドイツに暮らしている。若者はドイツに行きたいと考えているらしい。そして父母も同じ考えているらしい。

まだ散歩をするようになって初めのころ、ジャハングールが、今日はどこを散歩しましょうかと聞くので、私は普通の住宅街を歩きたいと答えた。ジャハンの家のある共同住宅の裏を走る道を90度曲がり、北に向かって進む路面電車の線路を伝って、ジャハンと私は暗い夜道を歩いた。左手に走る道の向こうに住宅街を見ながら進み、やがて二つに分かれる線路に沿って左に曲がった。

「ここは医者町の町と呼ばれています」と、ジャハン。医者が多く住んでいるという。電車道から離れて左手の住宅街に入った。ここは旧市街の一角だが、町の中心に向かってファロビイ通りの両側に広がっているあたりと違い、土塀と窓一



タシケント市内には多くの路面電車（トランバイ）が走っている。

つない家屋の間を狭い道が走っている旧市街特有の狭苦しさがない。道の両側には並木があり、頑丈に鉄製の網で守られているものの、家屋には窓があり、全体に地味な色彩ではあるものの、ときには白や水色や明るい茶色の壁や窓枠が見えて、落ち着いた住宅街の風情がある。

「あれはマハラの偉い人の家です」

歩いているジャハングールが、とつぜん大きな一軒の家を指差して言った。マハラというのは、町の区域を、かつての日本にあったような隣組に仕切っている住民組織で、2000から3000戸からなるという。各マハラには固有の名前があって、このとき歩いていた住宅地はミルザ・ゴリブ・マハラと呼ばれるところだった。隣にはユニベルシテート・マハラ、ウズベキスタン・マハラがあり、私たちの住んでいる共同住宅はウズベキスタン・マハラの中にあるが、組織としては共同住宅の南側に広がるフバイド・マハラに属している。マハラの

偉い人は祭り、結婚、葬式などを住民が行なうときは、いろいろな取り決めを行なって実行する手助けをする。それ以外のことで関与することはないが、地方に行くと、女の子が夜遅く歩いていると注意するし、親に言いつけたりするので、若い人はこわがる。フェルガナで、そういう現場を見たことがある、とジャハンギールは説明した。政治的に住民を支配することはない、とも言っていた。しかし、1999年2月16日の大統領暗殺未遂事件のあとに、カリモフ大統領が犯人の割り出しにマハラの協力を求めていたところを見ると、住民に対するマハラの見方は隠然として大きい。マハラは家族のようなものと考えられています、とジャハンは言った。

オリポフ家に住むようになって間もないときに、ジャハンギールの19歳の誕生日会があった。近隣の若者、特に小さいときに同じ学校に通った同窓、大学の同級生が交じっていたが、あとで写真で見ると、最後まで残っていたのは近隣の若者だった。上限を16人とする10人くらいからなるウルパットと呼ばれる仲間組織を作るのが習慣で、仲間の結婚などでは、式の準備のためにお金を出し合ったり、客の接待を手伝ったりする。勉強仲間、仕事仲間、そして近くに住む仲間などで構成する。この互助組織に男女が混在することはなく、女性も女性のウルパットを作る。「誰々さんは私のウルパット」というように言う。ウルパットが集まって、仲間の一人が料理を作り、この料理がおいしければ、みんなが1万スムを上限にして合計で5000スムとか1万スムを、料理を作った人に上げるのが決まりになっている。ウルパットがカフェやチャイハナに集まるのをギャラットという。

私の身内に不幸があって一時的に日本に帰らなければならなくなり、日本語を学んでいるジャハンギールに日本を見せるために日本に来ることを決めたときに、近隣の若者が歓迎会を開いてくれた。集まったのはバハディル、マールーフ、オジュクバン、それに、まだ中学生くらいのマンスール。ジャハンは私は、ユヌサバードのチャイハナでご馳走になった。日本から帰ったときも、チロンザールのチャイハナで歓迎会を開いてくれた。集まったのはバハディル、マールーフ、エリヨール、アリシヨール、ファルヒ、それに、このチャイハナで働いて料理を運んでくれたオジュクバン。

若者時代に構成されるウルパットは、年齢が進んでも続くらしい。ジャハンギールの父のオリポフ氏の仕事仲間の集まりで、私はチロンザールのチャイハナに連れて行ってもらった。巨木の茂る林の中にハウズと呼ばれる池があり、池の近くに木製のテーブルが広く間を置いて、しつらえてある。キャンプ地で炊事をするように、何組かのグループが料理を作っている。普通はプロフを作るのが決まりで、玉葱、人参、にんにく、赤かぶ、ねぎ、羊の肉など

を、分担して男の手で切っていく。これと平行して、ウオッカを飲むためのサラダ用のトマトと青い野菜、ピクルス、酸味のあるクリーム状のペーストなどが用意されていく。プロフの材料がそろったところで、何人かが竈のあるところでプロフを作る。大きな底の丸い鍋に入れた油の中で、肉と人参と丸ごとのにんにくを炒める。十分に炒めたあとで米を入れ、同じ油の中で炒める。そのあと1時間以上蒸す。でき上がるのに、たっぷり2時間はかかる。竈で世話をしない人はウオッカを飲み始める。全部で10人ほどだった。有名なフマリスト(宴席で笑話を交えて祝辞を述べるプロの噺家)がいたし、子供を連れた若い父親も参加していた。すべてが、まだ日の高いうちに進み、乾杯が何度も交わされて、すっかり酔って家に帰ったのは夕暮少し前だった。



チャイハナでは参加する全員が料理を作る。

オリポフ氏の別のギャラットにも参加した。1月の寒い日に二台の自動車で、タシケント市の北東にある標高3309メートルのチムガンに登り、スキー場の近くにチャイハナを探して、プロフを作って楽しんだ。いい歳をした男たちが、

小さい子供のように雪遊びをしていたのが印象的だった。このグループは、結婚式のときのリムジンの運転手仲間で、全員が6人の構成だった。まったく同じ仲間が、それから一ヵ月もしないうちに、仲間の家に集まった。広い中庭の一角にある竈でプロフを作る準備が進められていたが、火が燃えて、料理の初めの手順が終わったところで、私たち全員が部屋に入ってウオッカを飲み出し、プロフ作りは奥さんに任せてしまった。

「付き合いの悪い者もいますよ」と、ジャハンギールは言った。「適当な理由を言って、会えば挨拶をするだけで、誰の仲間にも入らない人もいます」と、ジャハンは言葉を続けた。そんなジャハンが、ある日怒って言った。

「リツェの同級生が、いついつに自分の結婚式があるので来てくださいと電話で言ってきました。つまり客として招待するということです。でも失礼じゃありませんか。本当の友だちなら、いついつ結婚したいから手伝ってくれと頼むのが礼儀でしょう。先生、分かるでしょう。相談されて、手伝ってあげるのが友だちでしょう。招待されて客として行くのなら私は嫌いです」

この同級生の結婚式を無視することもできなかつたらしく、ジャハンギールは嫌々ながら出席したらしかった。「あまり親しくなかつたけれども」と、ジャハンは言っていた。

姉のディーリア（デルフーザの愛称）の嫁入りで高価な家具調度品を婚家に贈らなければならなかった話になったとき、こうも言っていた。

「ウズベキスタンは厳しい。習慣、習慣」

そんな彼がまた、こんなことも言う。

「私には、育ててくれた両親を大事にしてあげる義務があります。どの親も亡くなるとき、他人ではなくて、自分の子供に抱いてもらいたいと思っています」

葬式の車を見てから1年くらい経ってからのことだった。たまたま親と子の絆に話が及んだとき、ジャハンギールはウズベク人の習慣を誇りをもって語った。

「近くに住んでいて亡くなった老人はロシア人だった。私が小さいころ、私の家にきて、ウズベク人の習慣がうらやましいと言った。息子は結婚して20年以上も一度も帰ってこない。娘も、たまに顔を出すだけ、と老人は嘆いていた。よく母が薬をあげたり、注射をしてあげたりしていた。つらい話なので、よく覚えています」

婚 礼

二人の女の客人がやって来た。ディーリアをお嫁に欲しいという話が来たらしい。客人に見られてはいけないというので、ディーリアとジャハンと私は台所のドアの後ろに隠れて、客の様子をうかがった。やがて客人は玄関を出ていった。私たちは三階の窓から、なおも客人の姿を隠れて追った。ディーリアの顔は真剣だった。結果は何も分からなかった。すべてはまず親の判断が先行する。しかしディーリアの結婚が遠くないことを、私は感じざるをえなかった。ジャハンは19の誕生日を祝ったばかりで、姉のディーリアはまだ21歳だ。

いつも私の食事を作り、私の洗濯と部屋の掃除をしてくれるディーリアが嫁に行ってしまったらどうなるか、わたしは半ば冗談に家族みんなのいる前で聞いてみた。ジャハンの母曰

く、ジャハンが洗濯、先生は料理、お父さんは掃除、私は仕事。

一年以上経ち、私の帰国が一月と少しあとに迫ったとき、ジャハンの母が私に私の帰国日を延ばせないかと言う。私はずっと前から3月4日に帰ると宣言していた。私は延ばせないと答えた。

あとでジャハンが私に言った。

「ディーリアが3月の末に結婚するんです。母は先生が帰る前に結婚式ができないかと相手方と相談しているらしい」

婚礼は2月26日と決まった。1月30日に結納が行なわれた。2月に入って、しばらくすると、親戚の人々がお祝いの品物やお金を持って訪れるようになった。ディーリアは2月2日に相手の男性と二人だけで会っている。2月20日に、親戚の女性たちが、すでに買って送ってあった家具調度品を婚家に備え付けにいった。婚家はタシセントの町の郊外を車で西に30分ほど行ったところで、二人は結婚の半年後には市内に引っ越してくるという。2月25日に、ジャハンの家、つまりオリポフ家の知人、友人、近隣の人々を持って成して前祝いの食事が振る舞われた。客は50人くらいで、すべて男性。それが終わったあとの午後3時ころ、1台の大型トラックが花婿からの贈り物を運んできた。羊が1頭積まれていた。ジャハンの従兄のボーディルが、この羊をこの日のうちに解体した。タシセントで解体を見るのは3度目だ。これまでの羊と違って、この羊はボーディルの持つ小刀に終始おびえ、四肢を縛られて横たえられたあとも、視線は小刀の行方を追っていた。

翌日の2月26日は、午後の1時にプロフを振る舞うことから始まった。潮礼の祝いのおきのように男たちだけがやってきて、席に導かれて、運ばれてきたプロフを食べながら、みな整然と立ち去っていく。200



羊の解体。

人くらい座れる野外の席が、緩やかに全体で3度から4度入れ代わった。この接待は4時には終わった。夜の7時を過ぎたとき、楽の音も高らかに花婿の一行が到着した。一行は家の中に導かれた。花嫁の側から花婿のための煌やかな婚礼の衣裳が贈られ、花婿はその場で、その衣裳を着ると、一行とともに、用意されてあった料理をあわただしく食べた。ドレスを着た花嫁のディーリアを女性たちが取り囲んでいた。親戚の女性がすべて集まっていた。まず花婿の一行が外に出る。次いで3人の叔母に囲まれて花嫁も外へ。お祈りと挨拶のあと、新郎新婦はリムジンで宴会場へ。新婦側の男性はすべて家に残った。私は特別の計らいで宴会場に出かけた。会場はすべて女性だった。中央の奥の壇には新郎新婦が座り、ディーリアの横には叔母と姉が座っていた。スピーチがあり、フマリストの話があり、踊りがあった。私もまた踊った。

このあとの二日間のことを私は知らない。すべては新郎側の家で執り行なわれたからだ。この数日間に、新郎側の男性の友だち、新婦側の女性の友だち、老人と若者、男性と女性をそれぞれ別の対象にして、行き来をしたり、供応したりする多くの小行事があることを、わたしはジャハンギールから聞いている。新郎側から言えば、男性がプロフを食べるパーティに始まり、付添い人と4人でモスクに行き指輪を交換し、結婚の報告をする。それから町の記念碑や彫像を訪れて花輪を捧げる。

3日後の2月29日に、新婦が戻ってきて実家の者に挨拶をし、最終的に婚家に帰って



親戚の女性たちに囲まれた新婦のディーリア。

く宴が行なわれた。これにはジャハンギールの家のすべて、男性も女性もすべてを含めて参加した。宴の途中でディーリアが白いヴェールを被って会場に現われ、会場みんなに祝福された。宴たけなわの中で、ディーリアはヴェールをとって普通の姿で実家の人

たちと話をし、ときどき実家の人たちの間で踊っていた。やがて帰るときが来た。立ち並ぶ親族の婦人たちに抱擁して別れを告げるディーリア。互いの目に涙が見える。私も同じようにして別れの挨拶を終えた。

結婚可能な年齢は男子が18歳、女子が17歳。大学4年生のイスカダールは、卒業半年前の12月に結婚した。式の準備で行き来していたイスカダールの友人の一人のエリヨールに、私は「イスカダールは嬉しいだろうね」と聞いてみた。

「嬉しくないですよ」と、エリヨールは即座に答えた。なぜ、と私が聞いたら、エリヨールは確信に満ちて答えた。

「家庭を作らなければならないし、子供ができれば養育しなければならないから」同じことをアジムに聞いたけれども、答えは同じだった。ジャハンギールは、姉が結婚したことによって次は自分が結婚するように言われるのを恐れている。「反対できないの」と聞いたら、それはほとんど不可能だという。「おや、おまえはそんなことを言って、いつ大人になったの」と皮肉を言われておしまいだという。結婚式の行事の中に、新婦が純潔であったことを知らせる儀式がある。私はディスコに行く機会があった。深夜まで開かれるディスコには、ロシア人や、その他の民族の女性の姿はあったが、ウズベク人の女性の姿はほとんどなかった。

変化は起こっている。自分の結婚が自分の意のままにならないことに触れたあと、ジャハンギールは言った。

「タシケントは変わってきた。今日バスに乗ったら、12、3歳くらいの小学生が女の友だちを家まで送ったという話をしていた。私のころはそんなことはなかった。みんなの前でキスをする男女が増えてきた」

私の手元には、コディルジョンが兄の結婚式のときに私のところに持ってきてくれた招待状がある。金色の文字と絵が印刷さ



嗜れ姿の新郎（イスカダール）と新婦。

れた小切手くらいの大きさの二つ折りの紙を開くと、左手のページに次のような詞が記されている。

父から許しが出ました／独立生活の第一歩を踏み出します／私たちは約束します／母たちを尊敬します／新しい家族を強く作って／平和な生活を約束します／ご馳走はあなたがたのものです／私たちのパーティに招待します

このメッセージは、現実には若者に及ぼしている今の力を表わしている。新旧のエネルギーの衝突はすでに始まっている。

言葉

おばさんが、あたりに遊んでいる子供たちに何かを話していた。これを聞いた通訳のイワンが、驚いたように私に告げた。

「あれはタジク語だ」

若者と組んで一時的に調査隊を組織し、ブハラ、サマルカンドと回ったときも、アジムが驚いたように言っていた。

「あれ、タジク語を話している」

建築現場の職人を差配し、監督しているウミドさんが、ある晩のこと、近くの工場に行くから一緒に行かないかと誘ってくれた。怖いほど乱暴に運転するオベルに同乗して、タシケント郊外の工場を訪れると、5、6人の職人が出てきてウミドさんを迎えた。ここは細かい装飾を施した扉を作っている工場で、製品のすべては機械によるのではなくて職人の手によって作られていることが、私にも分かった。木の匂いが漂い、あちこちに未完成の扉が置かれていた。「美しいでしょう。日本にもありますか」と、ウミドさんが言ったのを、ジャハンギールが通訳して私に伝えてくれた。ジャハンと私は暗闇の中を二階に登り、下方に川が流れている高台に立った。蛙の鳴き声が聞こえてきた。蛙の鳴くところは川がきれいだとウズベキスタンでは言います、とジャハンが説明した。いざ帰ろうとして、ウミドさんのいるところに戻った。ウミドさんは一人の職人と話をしていた。

「タジク語を話している」と、ジャハンギールが言った。それから、暗闇の中で退くようにしながら私にささやいた。

「親方はサマルカンドから来たんです。私にとっては、外国にいるみたい」

数は少ないが、ロシア語しか話せないウズベク人はいるし、地方に行くとロシア語ができないウズベク人がいるというのが、ロシア語とウズベク語をまったく自由に話すウズベク人が、一般人の間でタジク語を聞くと、何か異様に興奮する。ウズベク語でロレと呼ばれる放浪の民もタジク語を話すけれども、ウズベク人が一般人のタジク語に示す興奮の度合いが違う。

当時のウズベキスタン駐在日本大使が、大使の主催する私的談話会で語ったところによると、数年前に隣国のタジキスタンがサマルカンド祭を計画した。サマルカンドはウズベキスタンにある都市なので、これは政治的問題になる。ウズベキスタン政府はただちに中止を申し入れた。タジキスタンが、ブハラ、サマルカンドに栄えたサーマーン朝文化を祝うということで、この問題は決着した。ペルシャ系文化を引き継ぐタジク人の多いブハラ、サマルカンドがウズベキスタン共和国に入っているということが、ソ連時代を通じて成立した地理的規定概念を一気に崩壊させてしまう危険をはらんでいる。これは中央アジアだけの問題ではなくて、偶然性を起点に置か想像に基盤を求めるかはともかく、主権を持つことを原則として成り立っている近代国家成立の恣意性に関する問題でもある。

かつてアムール・チムールは低く評価されていた。醜くて残酷な人物として歴史の教科書に載っていた。今はタシケント市の中央に、それから、チンギス・ハーンの軍隊によって破壊されたサマルカンドを復興した栄誉を担って、サマルカンド市の中央に、それぞれアムール・チムールの像が立っている。

「アムール・チムールはウズベキスタンだけのものではないから、タジキスタンやアフガニスタンと共有して、共通の英雄として称えることはできないのだろうか」と、ジャハンギールに聞いたことがある。ジャハンギールは困ったような顔をして黙っていた。私の言葉は残酷だったかもしれない。日本人人質の解放直後に、この人質事件問題について聞いてみた。ジャハンギール曰く。

「先生、ウズベキスタンは、いつタジキスタンからテロリストの攻撃を受けても不思議ではないんです」

じじつ、人質解放から一ヶ月も経たない11月18日の新聞に、サマルカンドの南の山の中で、特別警備隊が外国からの侵入者に襲撃されて警官3人が殺され、警備隊も5人を射殺したことが報じられ、テレビが生々しい映像を映し出していた。これも解放直後のこと、新聞の一面の下半分を占めて、50名ほどの文化人が名を連ねた声明文が載っていた。解放を喜ぶ気持が表明されているかもしれないという期待があったために、そこに書かれている現実

は一段と厳しいものだった。日本と日本人という言葉は一つもなかった。あったのは、ただ、テロリストを殲滅する機会を逃したことの悔しさと、不可解な解決に対する疑義の表明だった。

「ウズベク人は死者が呼吸できるように、ただ土をかぶせるだけなのです」



ウズベク人の墓は土を盛るだけ。

ジャハングールの母方の祖父母の埋葬されている墓地を訪れたときの説明を聞きながら歩いていたら、ロシア人風に建てた石碑の一つに、若い兵士の写真が刻まれていた。アフガニスタンで亡くなったウズベク人の墓だった。そのアフガニスタンから、頻繁に

麻薬の密輸が行なわれ、トラックや人体に巧妙に仕組まれた密輸の手口をテレビは連日放映して、注意を促していた。押収した250トンの麻薬を焼却処分する映像もあった。

このウズベキスタンで、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギスタン、アゼルバイジャン、トルコ、アメリカ、ロシアの合同軍事演習が行なわれたことが、1998年11月17日のテレビで放映された。友好と協力関係を確認するのが目的で、実質的な演習ではなかったようだった。しかし、厳しい面がニュースの中には見え隠れしている。1999年12月には国会議員選挙が行なわれた。選挙前の新聞に、私はかなりていねいに目を通した。自由意志で一票を投ずることの意義を連日のように説いている記事には好感が持った。民主的になろうとする情熱すら感じられた。テレビは連日、厳密に時間を計って個々の候補者の政見を放送し、選挙は白熱した。結果は250人選出のうち184人しか決まらず、あとは第二回投票に委ねられた。1月には大統領選挙が行なわれた。すると、同じ国民選挙でも、どことなく論調が変わった。現職と対立候補者の政見に茶番じみた違いが感じられた。新聞の記事に、国会議員選挙のときのような民主主義を説くような情熱は感じられなかった。この二つの選挙では、

西欧の監視団が駐在した。日本からもやってきた。人権について外国から抗議を受け、いわゆる民主制について子供が大人に指導されるような構図が見えた。市場経済に移行するための経済援助の見返りは大きい。

若者を海外で学ばせて国作りに寄与させようとする意図で、大統領が留学生のための奨学金制度を設けた。現在、この奨学金を受けて、およそ 800 人の若者が海外で学んでいる。しかし、ヌクス大学の学長の次の言葉は、この国作りのための留学制度が必ずしも思うようにいっていないことを物語っている。

「ウズベキスタンの若者は、いまひとつ国を作ろうとする情熱に欠けているように思われる。外国で学んだ若者がウズベキスタンに帰りたがらない」

チムガンに行く自動車の中で、運転手がハンドルを握りながら話した。「社会主義のほう楽だった。ただ真面目に働いていれば生活ができた。カピタリズムでは、いろいろと考えなければ生きていけない。金を銀行に預ける人なんていない。100 スム預けても、インフレで、すぐに 200 スム払っても足りなくなる」

若者にも言い分はある。ある若者の話。

「1983 年から 1984 年にかけて、ウズベキスタンの指導者は綿花のことでソ連の司法大臣に処罰され、シベリアへ送られた。もともと、この綿花の扱いは 1930 年代にモスクワが決めたことだった。ウズベキスタンでは誰も抗議しないで、むしろ、みな密告した。ウズベク人は自分だけの利益を考え、自分の国のことは考えない。自分が良ければ、それでいいと思っている。意識が低い。戦おうとする気持がない。みな賄賂が一般化している。どうにもならない。私は大きくなるにつれて、だんだん分かってきた。この国には自由がない。だから、この国にいて、この国を変えようという気もなくなってしまう。ウズベク人が互いに、いがみ合い、闘っている状態だ。希望があるとは思えない。ジリノフスキーがカリモフに、ウズベキスタンはどうかと聞いたところ、カリモフは、ウズベキスタンには 2300 万人の羊がいるだけだ、と答えたという。国民を哀れな生き物だと考えている」

「新聞を読んでいる」と聞くと、多くの若者は、読まないと答える。まったく関心がないという若者もいる。だからといって現実と自己の人生に目をつむっているわけではない。食堂で働くオジュクバンが、エリート学生として近所でも評判のパハディルに向かって激烈な言葉を投げかけた。

「君は自分の家庭のことを考えるかもしれないが、人間一般のことを考える人間にはならないだろう」

ある日、私のいる前で3人の若者が静かに話をしていた。しばらくすると2人の若者の間に激論が始まった。激論は2時間続いた。1人は体を震わせ、1人は泣いていた。泣いていた若者はイスラム国家を作るべきだと言う。体を震わせて怒っていた若者は、激論のあとの興奮の中で、相手が考える危険なプロセスを次のような言葉で私に教えてくれた。

「現状に不満で、学習や思索によってウズベキスタンの将来を考えるのではなく、ただ幸福を追求しようとする、短絡的にイスラムの呼び声に応じてしまう。学ばない、本も読まない、小さな悪いこともする、そして一気に幸福の国を求める」

かつてトルキスタンには二つの反体制運動があった。西欧を見ながら近代化に照準を合わせたのが、ブハラの古い政治体制を変えようとしたジャディド。ロシア勢力に反抗し、民族の自立を目指して徹底抗戦したのがバスマチ。今も庶民の間では、このバスマチという言葉が大っぴらに口外することはタブー視されている。バスマチの拠点だったフェルガナは、ブハラ、サマルカンド、ヒヴァとともに、ウズベク人にとっては重要な地となっている。

「ロシア語は発音がきれいだ」と、ジャハンギール。

「今はロシア人と話すときロシア語は使わない」と、アジム。

「ウズベク人の女性よりもロシア人の女性のほうが美しいと思う」と、マールーフ。

「タシケントのウズベク語にはロシア語が多く入って悪くなっている。



オリポフ氏の実家である農家の庭で（フェルガナ）。

きたない。標準語はフェルガナで話されている」と、ジャハンギール。

これがみな、ウルパットで繋がる親しい仲間なのである。

試 練

オリポフ家が新しく購入した共同住宅の一室から、アブダーズムの幼い声が聞こえていた。私は言葉が分からない。ジャハンギールが、ささやくようにして教えてくれた。

「いま流行している歌を歌っているんです」

つい先程までジャハンに体をすり寄せていたものを、ジャハンが「何か歌え」と命じたらしい。すっかり照れてしまったアブダーズムは、私の背中を見るようにして私から隠れ、誰もいない部屋の隅で、それでも私に歌っていることを知ってもらおうとして、大人の歌うような歌を口ずさんでいた。こめかみが痛くなるような可愛さが走る。アブダーズムはまだ3歳。1年前、まだ、はしっこく歩けなかった2歳のときに割礼を祝った。割礼は兄弟の中の2歳から5歳の男の子を3人一緒にして行なう。3人にならない場合は年を遅らせて調整する。今回はジャハンギールの従弟3人が祝った。お祝いは、衣裳を着けた子馬に乗って家の周囲を3回まわり、この子ありと近隣に知らせる。500人、1000人と人々を招いて歌と踊りで祝福する夜の宴があり、プロフをご馳走する早朝の会食がある。馬の蹄を象ったサムサ（ミートパイの一種）があり、馬肉のハムがある。馬の肉（カズ）は子供に力と勇気を与え、男性を精力的にするという。「カズを食べれば、ますます妻を愛し、テロリストにもなる」という半ば冗談めいた男の話は私は聞いている。宴席はすべて男性だけで、女性の姿は裏方に見えるだけ。日本の七五三の祝いを連想させるので、女の子に似たような祝いはないのかと聞いてみたが、ないという。夜の宴では、私も、イスラム教徒の男子の正式の服（チョボン）と帽子（テレパキ）を着けて踊った。割礼式、つまり割礼そのものを見たわけではなかったで、「ほんとうに切るの」とジャハンに聞いたら、「もちろん切りますよ。痛くて泣きますよ」と、ジャハンは事実の重みを強調した。

こめかみの痛くなるような可愛らしさは、アブダーズムの姉のドロバル、さらにその姉のディリドーラが訪問してくるときにも経験する。とりわけドロバルはジャハンギールに顔つきが似ていて、兄妹と間違えてしまうくらいだ。ドロバルは話をするのが好きで、また上手だ。ある日、ドロバルはジャハンとジャハンの母と私のいる前で、大きくなったら何をしたいか、何になりたいかを、およそ10分くらいの間に、すらすらと一気に喋った。それは未来の夢、人生の夢であり、幼い子供が抱き得る奔放な想像の断片が鑲められている世界だった。唐突ではなくて自然だった。可愛らしさも想像の世界も、日本で生活している

日本の社会で起こり得ることと何も変わらなかった。

アムール・チムールの孫で、高名な天文学者でもあったウルグ・ベクの建てた天文台跡にある博物館に、ウルグ・ベクが縄にかけられて今にも刀で斬られようとしている一枚の絵が展示されている。ウルグ・ベクは息子に殺された。なぜ息子に殺されたのか、と私はガイドに聞いてみた。

「当時の聖職者たちの陰謀によるものです。宗教家たちは天文学が盛んになるのを好みませんでした。そこでウルグ・ベクの息子をうまく騙して、ウルグ・ベクを殺すように仕向けたのです。息子はウルグ・ベクを殺したあと、しばらくして殺人の罪に問われ、やがて死刑になりました」

その後、この博物館を訪れるたびに、私はこの絵を写真に撮った。同じことを何度も繰り返した。そして今でも、サマルカンドと言えば、この絵を連想する。一つには歴史の中のヨーロッパを連想するからであり、また一つには権力と私人の間にはどんなことも起こり得るという教訓めいたものを感じるからかもしれないが、私には自分でも十分に説明のできない一種の嫉妬も感じるからである。中央アジアがヨーロッパの版図に入り、ヨーロッパの文化圏に組み入れられたか、組み入れられるかもしれないという心配。

路面電車に乗って終点まで行き、ふたたび同じ路線を走って、郊外近くからタシケントの街の中心に戻っていく電車の中から、私はときどき、どこかで見たような風景に出会ったという印象を受けた。それがどこであるか正確には思い出せないのに、結論は決まってアメリカのどこかで見た風景だということだった。決して日本で見た風景ではない。建物の作りといい、道路の走り具合といい、アメリカの風景と似ている。私自身が、どこか普遍的でない世界、なにか特別な世界から来たような感じ。こんなときは必ず、今のままでいいのだろうかという疑問と、どこか、いたたまれないような不安が起こる。

断食月（ラマダン）が始まると、子供たちがお菓子やお金をもらいに、家々の玄関を訪れる。この光景はハロウィーンの光景と同じだ。ロシアを通じてキリスト教の行事として伝わってきたのかもしれないと私は思った。たとえそうだとしても、中央アジアには、キリスト教との近親性、類似性がある。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教が骨格としては同じであることを神経質に思い巡らしていた私のことを知らないジャハンギールは、歌を歌って騒いでいる子供たちの声を聞きながら、大人の優越感をもって言い放った。

「昔はいっぱい儲けたんだけどなあ」

まだ散歩を始めてから間もないころ、ジャハンと散歩から帰ってきたら、バハディル、マ

ールーフ、オジュクバン、アンワル、それに、そのとき初めて会ったウミドさんが、庭先で集まって話をしていた。挨拶を交わしたあとで、私は、これから機会があれば、さまざまなことで話をしたり議論をしたいと提案した。これがウミドさんを刺激したらしい。私が日本から来たことと、日本人は仏教徒であることを確認したあとで、ウミドさんは急に挑戦的になった。



選挙の投票所にもなる町内のモスク。

「自動車は人間が作ったものです。宇宙も誰かが作ったとは思いませんか。わたしはあなたにコーランの字を無料で教えます。私はイスラムを説明することができます」

私は黙ってしまったので、ウミド

さんも、それ以上言わなかった。その後も、そのような議論を私が求めているわけではないと知ったらしく、論争めいた話はしなかった。しかし、この一事は、この地がイスラム教徒の住む土地であることを語っていた。私たちは親しく話をすることができるし、互いに尊敬し合い、ほとんどすべてについて理解し合うことができる。しかし、この心の一点、つまり、人生観と言ってもいいし、信仰と言ってもいいし、宗教と言ってもいいかもしれないが、理解し得ないかもしれないという怖れがある。この一点は理解し合わないまま、交際を続けることはできる。この一点、つまり、絶対的に個人的で孤独であるはずの信仰をプライバシーの問題に閉じ込め、歴史の中に生き続けて人々の心を支配してきた宗教を、これもまた一つのフィクションにすぎないと見なしに関与しないようにすることしか私にはできなかった。

ジャハンはイスラムの教えをたくさん語ってくれた。その中に次のような話がある。

「母が子供を育ててくれた恩は、子供が母を背負って世界を一周しても足りない、とイスラムは教えている。ある盲目の母がいた。息子がメッカに行くというので、どうか私も連れていってくれ、私を一人にしないでほしいと母は息子にお願いした。息子は、母を連れてい

けば足手まといになるし、自分がメッカに行くことが大事なので、母親の願いを退けた。息子がメッカに行く途中、たまたま逃げていた盗賊が、奪った品物を彼のそばに置いて逃走したために盗みの嫌疑を受けた。息子は盗んだと言わなかったために目をくりぬかれた。ここで息子は、自分に降りかかった災難は母親の願いを聞いてあげなかった罰だと悟った。人間が死ぬと、髪の毛くらいの細い橋を渡らなければならない。悪人は渡る途中で橋から落ちてしまう。人間の一人一人の中に神がいる。死んで神の前に立つと、すべて、いいことも悪いことも顔と体に現われる」

何度目かの日本文化の講義の中で、私はウズベキスタンの若者に仏教徒の地獄のことを説明した。源信の地獄の描写を紹介し、地獄絵を見せた。ジャハンの話の一部は仏教徒の死生観にも一致する。人間の情念が似ているのであれば、いくつものフィクションの中に似たような情景が出てきても不思議ではない。

ヒヴァの王宮跡の入口に小さな博物館がある。ここに、かつて罪人を裁いた一連の処刑図が展示されている。その一枚に、一人の若い女性が体を縛られて、下半身を穴に埋められ、今にも石に打たれようとしている。その背後には一人の男性が首に縄をつけられて台の上に立ち、縄の先端は上方の木の枝に繋ぎ止められている。

「親の決めた男と一緒にしないで、別の男と一緒にになった女は、昔はこうして石で打たれて殺されました。男もまた、こうして殺されたのです」

ガイドの説明は簡潔だった。しかし、昔というのが分からなかった。ヒヴァには奴隷市場があった。ロシア帝国のヒヴァへの介入は、ロシア人の奴隷を解放するようにと迫ったのが発端だった。隣国の王、ブハラ・ハーン（エミール）は広場で罪人が処刑されるのを王城から見物するのを日課としていたことが知られている。大統領の命を狙った爆弾事件の直後のインタビューで、大統領は「このようなことをする者の手を切らなければならない」と言っていた。法廷で判決を受ける被告たちは手錠をかけられ、檻の中に入れられている。

男女の不倫を扱った欧米キリスト教社会の『緋文字』の世界が連想される。しかし、連想を確実な論証まで推し進めるためには多くの溝が横たわっている。欧米に記されている幾つかの革命、トマス・ペインの『人間の権利』やジョン・S・ミルの『自由論』といった書物が展開する人間の概念、19世紀、20世紀を通じて歴史に記録された西洋と東洋の不均衡な関係、一神教の文化に席卷されてきた現代の生活の周辺、こうしたことを有機的に組み込んだとしても、なお、包括的な人間と社会は何かという問題は残る。

《付記》

私は在外研究員として、1998年9月から2000年3月まで、ウズベキスタン共和国で研究活動を行なった。活動の場所をウズベキスタンに決めることになった直接の動機は、1991年と1992年にかけて行なわれた「日中合同法政大学タクラマカン沙漠調査」に参加し、1992年に文化人類学班の一員として現地に赴いてウイグル民族の人々と接触したことにあった。そのために、当初はこの経験を生かして、通訳を含む小規模の調査班を組織し、各地方に出かけて行って、予め用意した一連の質問事項を尋ねることを繰り返す、いわゆる聞き取り調査を計画していた。

現実には何度か試みた結果、この方法が必ずしも好ましいものではないことが分かってきた。タシケント国立東洋学大学が住居として用意してくれた民家は、初めは短期間の宿泊地として準備されていたものだった。宿泊日数を重ねているうちに、日常生活を通じて、このウズベク人家族と、信頼関係が深まりつつあった。私は「アジアにおける想像」というテーマで生活レベルでの物の考え方を調査するという私の研究目標を家族の人々に伝えて協力を求めた。家族の一員に日本語を学んでいる学生がいたことが、大きな助けとなった。やがて、このウズベク人の家庭が、私の研究活動の中心地となった。

フィールドワークの場所としては、結婚式や割礼式の祝い、誕生日の祝い、新年や旧正月の祝い、ラマダンの終りの祝い等、多くの祝いの集いへの参加を初めとして、一般家庭への訪問、若者や勤労者との交歓、小・中学校と高等学校（リツェ）への訪問等が中心となった。また、ウズベキスタン各地（とくにサマルカンド、ブハラ、ヒヴァ）への旅行は何度も行なった。中央アジアの緑地として名高いフェルガナ盆地を訪れ、農家に宿泊した。タシケント郊外の山岳地帯を訪れ、人々の行楽の様子を見て回った。法政大学の水環境調査団に加わって、西北の地、ヌクスからアラル海を旅行し、地理、および生活文化についての予備知識を得ることができた。墓地を訪れたり、祈祷師にお祓いを受けたりしたことも、フィールドノートに記録されている。研究期間を通じて、特定の日に限定されない調査活動として、滞在家庭の若者との日々の散歩や、近隣の若者との意見の交換や議論がある。遊牧民およびオアシス定住農民としての伝統と、イスラム教文化、それに、生活の表層に長く根付いてきたロシアとソ連を通じた西欧文明が混淆するウズベキスタンでは、若い世代の考えが今後の動向に特に大きな影響を与えることは、滞在期間中に充分に感じる事ができた。独立して間もないことと、主権国家としての経験が浅いことが重なって、若い世代の中には、いまだ明確な将来へのヴィジョンが生まれていないと観測される。巨大な国際社会の動きの中で、国全体がそうであるように、若者たちは将来像を模索しているものの、激しい変化の中で、その端緒に

も着けないのが現状であるように見受けられる。このような感触は、日常生活における若者たちの忌憚のない発言から得られたものである。

資料の収集については、ロシア語の資料を中心に、ときにはウズベク語の資料も含めて学校の教科書、政策に関する大統領の書物、独立後の国の動向に関する基礎資料等を求めた。比較的新しく刊行されたものは極力集めたが、点数は限られていた。また途中からはロシア語の新聞を毎日求めた。主要な記事には目を通したが、まだ大半は読んでいない。しかし、今後、詳細な考察が必要になるときに、大きな力になると信じている。英語の資料はさらに限られていたが、これも、目に触れたものはすべて集めた。国際的に急速に外部に開かれた事情からすると、今後、中央アジアの研究者は確実に増えていくものと想定される。この観点から、法政大学にある「地域環境科学研究会」の今後の活動に資することを考慮して資料を収集した。

タシケント国立東洋学大学では、研究員受け入れの窓口として働いていただいた日本語講座室に、滞在中、終始出入りし、先生方の好意で教員会議にも出席した。教育現場から見た教育制度の現状と改革、および問題点等を少なからず知ることができた。このようなことから、日本語講座室の要請を受けて、日本語を学ぶ学生のために、私は1999年の2月から5月にかけて、日本文化に関する一連の講義を行なった。法政大学との協定校であるタシケント国立東洋学大学は、とりわけ、日本語教育を通じて、短期間のうちに法政大学との交流を深めている。日本文化（経済、歴史、文学等）の専門家による授業の必要性が大学当局によって指摘されているものの、実現できないままになっている。現在実施されている学生の交換に加えて、今後、教員の交換が望まれる。

今回の研究は、これまで私が行ってきた研究分野と著しく異なっているために、従来の研究分野にとらわれない方法を探るのも目的の一つだった。これは、新しい人間文化の創造を目指している国際文化学部の方々の今後の研究、教育活動とも一致する。ここに敢えて、このような形で綴ったのは、すでに激しい変化が起こっている中央アジアの一地域の現状を、少しでも関心のある人々に報告したいと思ったからである。

なお、この〈付記〉は、在外研究活動の報告として法政大学に提出した文章を、ほぼそのままここに再録したものである。